
マルティーン・ヴァルザー 『わが彼岸』 —— 憧憬の三部作 —— (その1)

洲 崎 惠 三

要約

Martin Walser は2010年 (82歳)『わが彼岸』, 2011年 (84歳)『母の息子』, 2012年 (85歳)『第13章』という小説を発表した。『正当性証明 (義認) 試論』(2011) を含めく憧憬の三部作といわれる。

『わが彼岸』のテーマは、老い、愛と信、信と知、真と偽などである。

州立精神病院長 Augustin Feinlein と Eva Maria は恋人同志であったが、彼女は他の男性と2度結婚する。彼女は彼に「私はいつまでもあなたを愛するでしょう。またすぐにね。」、再婚後「愛のなかで。Eva Maria.」という葉書を寄越す。Augustin は信ずる。真か偽かを問わず、ただ信ずる。ないものをあると信じること、それが彼の憧れであり、希望であり、彼岸である。しかし彼はローマの Basilica Sant'agostino で Caravaggio の「巡礼のマドンナ」に、憧憬の彼岸の顕現を見る。

信者の信仰も、その対象たる聖遺物の真偽を問わず、ただ信じる力が生きる力を与える。そこで Augustin は、形骸化した信仰から信者を守るために、キリスト昇天日の行列儀式に使う聖体顕示台を自室に持ってくる。おかしくなった老人とみなされ、自己の病院に収容される。

Augustin という名には、聖 Augustinus は無論だが、Augstein という含意もあるという指摘がある。Rudolf Augstein, ドイツの代表的週刊誌 Spiegel 創設者, 2002年逝去。その息子 Jakob Augstein が2009年肉体上の父は Martin Walser だと言明し、世間を驚かせた。

芸術 (Fiction) と人生 (現実) とは対立関係ではなく、芸術が人生を、人生が芸術を、豊かにし美しくする、という作者の言葉が生命をもつ。

キーワード: 1) 愛 2) 信 3) 聖遺物 4) おかしな老人性 5) 彼岸

1. 時代と愛

2010年2月 Martin Walser 82歳のとき『わが彼岸』(*Mein Jenseits*) という短編小説が、翌2011年7月84歳のとき『母の息子』(*Muttersohn*) という長編小説が出版された。前者は100ページ余り、後者は新書版でも500ページを越す。前者の短編は、5章から成る後者長編の第3章にはめこまれている。そして2011年11月には Harvard 大学招聘による『正当性証明 (義認) について, 試論』(*Über Rechtfertigung, ein Versuch*) という講演がなされ、2012年春改訂増補されて刊行された。2012年末には往復書簡小説『第13章』(*Das dreizehnte Kapitel*), 2013年には『演出』(*Inszenierung*) と

いう中編小説がお目見えした。『母の息子』『義認』『第13章』を作者自身「憧憬の三部作」と名づけている。

Martin Walser は1927年3月27日生まれだから、小論執筆時86歳、上梓時87歳となる。すなわち80歳前半から後半にかけて質量ともに驚嘆に値する創作活動の開花である。

前もって私見を述べるのが許されるなら、それ以前の作品群以上に筆者にはいろいろな意味でおもしろい。文体もより簡潔 (lakonisch) となり、わかりやすい。少なくない批評家や研究者の評した詩的言語表現の才能が²、若いときの奔放な氾濫状態から、Friedrich Nietzscheの『ツァラトゥストラはかく語りき』(Also sprach Zarathustra, 1885) のような音楽的、詩的、聖書の文体となって、人の心に訴える。最後まで読むのに難渋することの多かった外国語障壁も、主人公たちの相互関係の心理的綾の複雑さも少なくなって、先へ読み進むのが待ち遠しいおもしろさで、一気に読める。時空を超えて人間の生の根源的諸問題の核心に迫る魅力があるからであろう。

80歳を超えた Martin Walser の作品群を縫うテーマの赤糸は、老、信、愛、美、言葉、正当性証明 (義認)、希望などである。全創作の源流は窮乏、欠如 (Mangel) である。老いているから若い生命を、信じられないから信や愛を、この世は凄惨であるからこそ美を、人は全能永遠の生命に欠けるから神を、義のない自己正当化が蔓延するから真の義認を、希望し、書く。欠けるものがあれば、これを満たそうとする。Eros も同じ。欠乏がこの詩人のミューズ神 (詩の女神) であるゆえんである。一角獣は、欲望と純潔、反抗と恭順、絶望と希望 (期待) の象徴であろう。

1960~70年代、40歳前後は、Auschwitz や Nazis 問題、反 Vietnam 戦争等、権力行使と義と罪の問題が主なテーマであった。たとえば、『われわれのアウシュヴィッツ』(Unser Auschwitz, 1965)、『実践家、世間知らず、ヴェトナム』(Praktiker, Weltfremde und Vietnam, 1967)、『アメリカ人よりアメリカ的』(Amerikanischer als die Amerikaner, 1968)、『幽霊との握手』(Händedruck mit Gespenstern, 1979)、『終わりなきアウシュヴィッツ』(Auschwitz und kein Ende, 1979) など。Kommunist という批判を受けた。

1980年代後半、不惑前後の、ドイツ再統一をめぐる問題。『ドイツについて語る』(Über Deutschland reden, 1988)、『ドイツの憂慮』(Deutsche Sorgen I, 1989)、『アンティゴネー、あるいは良心の非理性』(Antigone oder Die Unvernunft des Gewissens, 1989) など。Nationalist という批判にさらされた。

2000年前後、70歳代の、平和賞受賞演説『記念講演執筆時の経験』(Erfahrungen beim Verfassen einer Sonntagsrede, 1998) や『ある批評家の死』(Tod eines Kritikers, 2002) をめぐり、反ユダヤ主義者という批判を浴びた。後者のモデルといわれた批評家の教皇 Marcel Reich-Ranicki (1920. 6. 2~2013. 9. 18) は、2013年9月18日逝去した。Martin Walser はその追悼文 („Ich bin ihm nahe“. Zum Tod von Marcel-Reich-Ranicki, Die Zeit, Nr. 40, 2013. 9. 26) で、Reich-Ranicki 自身が「この本は同情すべきほどよくないが、しかしけっして反ユダヤ主義ではない」と公言したことに、「この正確さに対して私はどれほど感謝していることか」と書いている。

Tübingen 大学 Friedrich Beißner 教授のゼミの上級生であり、Suhrkamp 出版社 (Frankfurt/Main) 社主であった3歳年上の Siegfried Unseld (1924. 9. 28~2002. 10. 26) の死 (2002) を契機に、Rowohlt 社 (Reinbek /Hamburg) への専属切り替えなど波乱万丈の作家生活のなかで、政治的社会的

テーマが多かった作風のなかに、愛をめぐる小説が Walser 文学の主流となる。

アメリカの諸大学の招聘講師の経験をバックにして書かれた『砕け波』（*Brandung*, 1985）以来、若い恋人と忠実な妻とのあいだを激しく揺れ動きながら、Ithaké の Penélopeia のもとに帰って来るというテーマが、『愛の瞬間』（*Der Augenblick der Liebe*, 2004）を経て『第13章』（*Das dreizehnte Kapitel*, 2012）にいたるまで老年の Martin Walser 文学の核となっていく。『愛の履歴書』（*Der Lebenslauf der Liebe*, 2001）、『恋する男』（*Ein liebender Mann*）も老年の愛の変奏曲である。

Schwaben の Scherblingen（架空、Weißenuがモデル）州立精神病院長である Augustin Feinlein と、後釜を狙う Dr. Bruderhofer は、老若、旧新の対立のみならず、たとえば患者治療をめぐり、前者は心理療法（心のケア）、後者は薬物療法というふうに、信仰と科学、信ずることと知ることとの対立をあらわす。

Eva Maria Gransloser という一人の女性をめぐる二人の老若男性、信と知の対立というだけでは、生の重層性に迫れない。そこでこの短編を中心に据えた5章から成る現代のキリスト物語という長編小説『母の息子』が翌年2011年に誕生する。

2. Eva Maria, 愛と信

『わが彼岸』の中心テーマは、古い、愛と信、信と知、真と偽などである。

主人公は63歳から年を数えないことにした、Scherblingen 州立精神病院長 Prof. Dr. Dr. Augustin Feinlein である。41歳の Dr. Heinfried Bruderhofer は後釜を狙い、彼を追い落とそうとしている。後者の妻 Eva Maria は59歳で、夫は18歳も若い。Augustin と Eva Maria は Konstanz 大学のラテン語ゼミで知り合い、婚約に近い状態だった。Augustin が助医であったとき、Eva Maria といっしょに、患者の Richard Sandro von Wolfing 伯にその城館に誘われたが、3週間後二人は結婚した。伯爵は60歳を超えて Eiger 北壁に単独登攀、天候の急変により墜落、ザイルに片足で吊り止まったが、凍死。おれはヨットのために生まれてきたと豪語する Dr. Bruderhofer に Wolfing 伯は豪華ヨットを譲渡。Eva Maria はオリンピックで惜しくもメダルを逸した200メートル自由形水泳選手で、水に情熱を燃やす。2年後二人は結婚した。

最初の結婚式のカードは、Picasso 1902年青の時代の『後ろ向きに座った女の姿』（*Sitzender Rückenakt*）だったが、そこに「私はあなたをいつまでも愛するでしょう。またすぐにね。Eva Maria」と書かれてあり、それからも年に1度、同じ文面の葉書が送られてきた。17年後再婚式のカードは、Gustav Klimt 1907年の《Danae》で「愛のなかで。Eva Maria」と記されてあった。

Augustin は走り、叫ばざるをえなかった。昼も、夜も。そして見こみのなさという状態、その言葉（Aussichtslosigkeit）と向きあわねばならなかった。おまえは問題にされなかった。この状態に耐えることはできない。離脱への見こみなし。古典的抑鬱状態となった。『疲弊消耗シンドローム』という第2の博士論文を書き、精神科医となった。そう、まさに Eva Maria によって。

「おまえの敗北は、おれについては何もわからぬ、説明しがたきものの勝利である。おまえはどの敗北によってもより希望がない状態になるにちがいない。しかし逆に、敗北から敗北へと

おまえの希望は高まっていく。たとえば、どの敗北でも、今度は自分の攻撃の番が来るという期待が高まっていくのを信ずる選手の敗北に似ている。あらゆるメールヒェン、あらゆる宗教の救済表象は、説明しがたきものを暗示する。疲弊するまで想像すること。それが目標だ。——信ずることを人が学ぶのはただ、それ以外何も残されていないときだけである。」(66)
「私はいつも壁に沿って歩いた。壁は切れるだろう、そのとき人生、充実した接触が始まるだろう。しかしそれは迷妄であった。この壁こそが人生なのだ。」(68)

なんの見こみもない絶望の壁に囲まれて、残るのは見上げる星空しかない。あるいは Friedrich Hölderlin (1770~1843) が歌ったように、鳴るのはただ風見鶏だけという囲壁に囲まれて、花咲く湖の白鳥の風景(「生の半ば」 *Hälfte des Lebens*, 1902) を想い描くしかない³。しかし天が授けた信や愛や想像や創造という人間の能力はそこに生まれる。

「私が叫ぶのをだれか聞くだろうか? <私はいつまでもあなたを愛するわ。またすぐにね>。17年後、<愛のなかで、Eva Maria>。何かを信ずることはいかに力を消耗するものであるか、私にはわかっている。しかし他方、ただひとつ信仰を生み出す条件は、見こみのなさである、ということも知っている。まだ何かが可能であるかぎり、人は信じない。不可能に応えるのはただひとつ信ずることによってだけである。窮地が信じることを教える。高跳び。重力に振り回されて。蒼穹まで。蒼穹に接吻しつつ、おまえは目覚めるのだ。恥じることなかれ!」(76)
「愛のなかで、愛しつつ (In Liebe) が、わが彼岸である。ないものを、信じること。それはあると信じること。」(80)

存在しないものを、存在していると信じること。それがわが愛であり、わが彼岸であると、Feinlein は思う。

「それを私は憧れと呼ぶ。状態ではなく、ひとつの運動。ゆっくりと激しく。わが彼岸も無。それはひとつの願望。欲求。窮乏。欠如である。」(80)

彼女が不在であるゆえにその存在を、欠如しているゆえにその充足を願うこと、しかしけっして到来しないであろう希望なき希望の、絶えることのない否定弁証法運動が、彼の愛であり信である。憧れであり彼岸である。

3. 彼岸, Caravaggio : *Madonna dei Pellegrini* (巡礼のマドンナ)

Augustin Feinlein はローマに行く。教会で息をするために。すると、自己は無くなり、大きなものと一体化する感じがする。空は鳥にとって、水は魚にとって、生きる要素であるように、教会は彼の生きる要素である。「サンタゴスティーノ(聖アウグスティヌス)教会」(Basilica Sant'agostino) に Caravaggio (1571~1610) の *Madonna dei Pellegrini* (「巡礼のマドンナ」「ロレートの聖母」) がある。その絵には、子を抱く美しく高貴な裸足のマリニア母子を見上げる、やはり裸足の足裏を見せて合掌しつつ敬虔な祈りを捧げる巡礼の農夫夫婦が描かれている。夫婦の足裏は、二人を思いやりに満ちて見下ろす聖母子に出会えた驚きと歓びでさながら踊っているかのように感じられる。夫婦から祈りの力が発し、それが夫婦を聖母子と同じ位にしている。

「どこからマドンナがイエスを得たのか、あえて考える必要はない。ただその美しさだけに価値がある。彼岸は美しいにちがいない。さもなければ彼岸などすぐ忘れてしまうだろう。彼岸がああのパジリカにおけるほど美しく示現しているときにのみ、彼岸は疑いの余地なきままでにおまえの心を満たす。しかしそれがそれほど美しいということの前提は、それが真実であるということだ。Caravaggio は、この絵を描く前に、巡礼者として Loreto に行ったといわれている。」(32)

かくして、ローマは Augustin の巡礼地であり、彼岸である。彼岸はひとつの叫びだ。人は追い詰められると、深みより叫ぶ。絶望状態のなかで窒息しないために、息を吹き返すようにもがく。彼岸の叫びに必要とするだけの空気を必要とするのだ。

Caravaggio の絵画 *Madonna dei Pellegrini* のさらに奥に、*Maria dell' Parto*（出産のマリーア）彫像がある。その上に *Virgo Tua Gloria Partus*（乙女よ、あなたの栄光は出産にあり）という銘文がある。左の側壁には Augustinus の母、聖 Monika のひつぎがある。そこの椅子に座り、何も考えないように瞑想していると、「おまえは存在しないものを信じる。するとそれがある。」という言葉が浮かぶ。しかしそこには「言葉なしに願望されたものの現前」があった。もし教会画家であったら、と思う。

天井画には、不安定な雲の上で、天の重荷を支えているが、何よりも軽く見える天使たちが描かれている。彼らは天にも地にも属さない。空気に属する。自分たちが何を支えているかは知らないが、たとえ天が空無であったとしても、それを持ち支える決意が童顔に表れている。

Baden-Württemberg 州 Rottweil 近くの Aichhalden にある St. Michael 教会のオランダ人牧師 Jan Verkade は、天井天使画に当地の少年少女を描いたが、自分の似姿も描きこんだ。そしてもっと重要なことは Eva と Maria を一つの像のなかに融合したことである。

すなわち Eva と Maria, 原罪をもたらした女と救世主を生んだ聖女との融合、ないし一体化である。

Eva Maria はわが彼岸、と語り手の私である Augustin Feinlein はくりかえす。

彼女は彼を2度も振った。耐えることのできない苦悩のなかに、希望なき希望がひそむ。

「私はあなたをいつまでも愛するでしょう。またすぐにね」。「愛のなかで、Eva Maria」。

その言葉が真実であるかどうかではなく、信じるほかはない。信じるとは存在しない山に登ること。存在しないものを、存在すると信じること。それがこの世を美しくする。愛すること、信じること、そしてそれを言葉に表現すること。するとそこには非在を存在に変容する力が芽生える。

ないものをあると信じること、それがわが彼岸である。

「Caravaggio の Madonna を見てから、Eva Maria は私の心のなかで重荷にはならなかった。憧れはもはや目的ではない。彼女はただなお彼女自身だ。——彼女は私の彼岸である。彼女を信じることはたやすい。彼女によって世界は彼女の存在よりより美しくなる。」(75)

4. 聖遺物

Donau 河とBoden 湖の間の地方ほど聖遺物 (Reliquien) 崇拜が盛んなところは少ない。たとえば Maria の衣服の糸, 毛髪, Mose の杖の一部, Golgatha の十字架の小片, 十字架のキリストに届いた酢と聖母 Maria の乳を含めた海綿, キリストの臍帯の一部, そして最も神聖な聖遺物として磔にされたキリストの血の数滴と, 沈黙すべきでないのは, キリストの聖なる包皮 (praepūtium) などである。

聖ヨハネ (Johannes) はキリストの亡骸を Maria が膝に抱いたとき噴き出したキリストの血を指大のガラスの壺に受け止め, トルコの Ephesus の岩屋に保存した。Patmos 島で黙示録を書いた Johannes は, Ephesus で Maria に仕えて, その晩年を過ごした。Paulus もそこで彼の重要な (新約聖書の) 手紙を書いた。Artemis, Kybere そして Maria 崇拜の聖地である。のちに岩屋の聖血は十字軍の騎士により発見され, 回り回って Scherblingen に至ることになったといわれる。

Augustin Feinlein の先祖 Benedikt Mangold 大修道院長はこの聖血聖遺物を1525年5月17日農民戦争の蛮行から守った, と5月25日付修道院日記に残されている。そして1529年聖血滴の入った水晶瓶を修道院長室で密封した。

1803年神聖ローマ帝国が全修道院を解散させるまで最後の大修道院長であった先祖のひとり Franz Feinlein は, とくに聖血聖遺物を啓蒙主義者たちに対し守った。Weißenau のプレモントレ修道院 (1120年フランスの Prémontré で, 聖 Norbertus が創立。白い僧服着用の修道会) には聖 Saturnius の遺骨が, Roma の Laurentius 祭壇下の棺から, 移送されたといわれる。その考証論文で試験に通り Eusebius Feinlein の名を冠せられた。

しかし Eusebius にことに関心があったのはキリストの包皮の発見と救出とその伝承である。それは長い間 Laterano (教皇宮殿) 礼拝堂にある黄金の十字架の後ろ側の銀製小箱 (Theca) に保存されてきた。それは Karl 大王が教皇に贈ったものである。聖 Brigitta von Schweden (1373年没) の *Revelation* (啓示) によれば, 「私の息子が割礼 (包皮切開) されたとき, 私はその被膜 (Membrane) を私の行く所どこへでも持ち歩き保管した。私から罪なく生み出されたこの包皮膜を, どうして私は大地に委ねることができたであろうか?」と Maria は言って, 包皮と十字架にかけられたキリストの傷口から滴った血をヨハネに渡した。しかしそれは1527年 Sacco di Roma (ローマ劫略) で略奪されたといわれる。

いろいろな伝説があるなかで, Eusebius は, 聖遺物が本物かどうかは重要ではない, 重要なのはそう信じることである, と思う。

1899年イエズス会で書かれたある雑誌に「聖遺物は偽物でありえようか?」という問いがあった。否。「聖遺物は信仰によってはじめて神聖化ないし本物となる。西欧の先祖は, 知りうるものは何かを, 知ってもいた。しかし彼らは信じようと思うものを信じた。先祖はそれをどう書いたか? 信仰とは, 存在しない山に登ることである。音楽も演奏しなければ, 存在しないだろう。存在しないものを, 存在すると信じること。信じられたものなしには, 世界はいつもなお荒涼として空虚だろう……信仰と不信仰とは対立ではなく, とどまることのできない運動である。信じようとする意欲

と信じることができないとの間をたえず揺れ動くことは、それが起こっている人が責任を負う。知る者はその知をつねに他人から得る。知る者は他人に投げどころを求める。信じる者は、信じようと信じまいと、自己自身が投げどころである。言葉は悲しいと、先祖は書いている。そして、われわれは、知ることより多くのことを信じる、と結んでいる。」(58)

信は不信を生み、不信は信を生むという、たえざる否定弁証法運動により生み出された信なくして、世界は荒涼として空虚であるだろう。知（科学）よりも美（芸術）が生きる意味を生むという Fr. Nietzsche の『悲劇の誕生』（*Die Geburt der Tragödie*, 1872）に通ずるものがある。

5. 知, 真, 美

「〈愛のなかで、愛しつつ。エーファ＝マリーア（In Liebe, Eva Maria）。〉、これは呼びかけではないだろうか？ いつまでも？ 聖遺物が本物であることは重要ではない、と私は先祖に学ぶこともできたのではないだろうか。聖遺物が本物であるかどうかは、おまえがどれほど信じることができるかによる。信じることはひとつの能力だ。才能だ。力だ。」(77)

信と不信は、表裏一体の感情、ないし実存である。愛も聖遺物も、あると信じればあるが、しかしすぐに疑いが生じる。あると信じてもないと信じて、はたしてほんとうにそうなのだろうかという疑いが生じる。信と不信は、ひとつのたえざる否定弁証法の運動なのだ。Karl Barth の「希望なき希望への信」に通ずる。

ただ信じることは知ることよりも多くのことを信じる。信じることは知ることよりこの世をより美しくする。Sokrates の知より Dionysos や Apollo の美の誕生である。知よりも美が、真に迫り真を表す。

In Liebe（愛のなかで、愛しつつ）は、わが彼岸である。わたしのそばに Eva Maria はいない。欠乏であり欠如である。ゆえに憧れる。ゆえに望む。欲求する。無かもしれないものを、あると、望むこと、信ずること。それがわが彼岸である。それは私の心に、光を与え、生きる力を与え、この世を美しくする。

知るより信じること。知よりも信が、生きる力を与え、生に美を生み出すこと。
それが本小説の核心である。

6. 真と偽

聖遺物も同じである。それが本物であるか偽物であるかは重要ではない。

「聖血は本物でないとはいるが、本物であると信じること、これこそ聖遺物を不滅の宝にするものであろう。」(107)

それが本小説の主人公 Augustin Feinlein の先祖から受け継ぐ聖遺物研究のテーマでもあったし、また終幕の意表を突かれる主人公の行為の動機でもある。

すなわち Feinlein は病院長といえども禁帯出の聖遺物（聖体顕示台 Monstranz）を司教座教会か

ら昔の修道院長執務室 (Prälatur) に無断でもちこむ。先祖がこの宝物を奪いあう時代の野蛮から救ったように、彼もまた信仰の形骸化、貶められた偽りの神聖さという危機から聖遺物を守るために、より安全な場所に移したのだ。キリスト昇天の日翌日には、毎年住民が聖体顕示台を拝む行列 (Blutritt) の祭りが行われる。聖職者たちは、水晶のなかにキリストの聖血滴があることなど信じていないが、あたかも信じているかのように儀式を行う。Dr. Bruderhofer はこの信仰劇を教会による信者の白痴化道具にすぎないと言っている。聖血が本物のように行うことも、その一切を白痴化作戦とみなすことも、Feinlein には等しく不快である。聖遺物は、崇拝されるためには、本物である必要はない、という教会の考えは彼も同じだ。しかしそれは信者たちに言われなければならない。本物も偽物かもしれない。大切なのは、信者が信じるということだ。信者の信仰は崇拝の対象をみな神聖なものとする。奇跡を起こすのは信者であることを、言わなければならない。近隣の別の聖体顕示十字架を借りて行列儀式が行われても、信仰や神聖さをなんら毀損するものではないと、聖職者たちから表明されることが、新しい信仰実践の始まりであろう。しかしこのチャンスは無視されてきた。私がこの聖遺物を返さなければ、借りた物は本物と信じられる。私の彼岸が公表されれば、すぐにでも宝物は返却する。そうすれば、聖遺物が本物であるかないかは重要ではないことが、実証されるだろう。

うわべだけの神聖な仮装劇、信仰の空洞化から聖遺物を救出することは Feinlein にとって、燃えさかる家から子供を救うような、義のある根拠と思われたが、客観的には窃盗とみなされた。尋問されたが、弁明は信用されず、自らの精神病院の一室に蟄居させられる。刑事罰に該当するのか、老化による精神の薄明化なのか、は明白にされていない。

7. 詩篇 (Psalm)

Feinlein の先祖の一人は、信仰とは存在しない山に登ることだと言った。なぜわれわれは信じるか？ なぜならわれわれには欠けているものがあるからだ。生きるに必要なもの、たとえば、愛、そして神。人間には永遠の生命が与えられていないからこそ、不死、万能、遍在の神を求める。信じようと努める。しかし神や愛への信は、不信と裏腹である。神は助けてくれない。現実は無道理で悲惨な地獄である。信じることは駱駝が針の穴を通ろうとするようなものだ。見こみのない希望。しかし信じることを人が学ぶのはただ、その人に信じる以外は何も残っていないときだけである。

「……

私があなただけを呼んでも、あなたはそれを聞かない、ということは知っている。

私の声を聞いたとしても、あなたは聞こえたことを否定する。

私は不在ということだ……

何の価値もない対象。あなたにとっても私にとっても。

抑えつけられたものの中には、呼ばれたいという憧れが眠っている。

憧れは眠っている。しかし私は目覚めている。

それが私の詩篇（Psalm）だ。

あなたは私と同じように忠実だ。私はあなたを信じる。信じるとは愛することだ。

あなたは私の幻想を打ち砕いた。

運命を私は口いっぱいほおぼっている。

あなたなしに世界は存在しない。

手を洗えば、あなたがいる。

神のように不在のままあらゆる樹々のなかに、あなたはそびえる。

空っぽの天に向かって祈る。呪いは私にはない。

私は私の舌を引きちぎる。

あなたに向かって叫ぶと、舌が再生してくる。

またすぐにね。愛のなかで。」（114）

希望なき希望への信、届かないメッセージと覚悟しながら、主人公は叫ぶ。

「Eva Maria は事件を知るだろう。すべては彼女に気づいてもらうためののみ起こったかのよう
に、私には思える。わが彼岸。—— 愛のなかで、またすぐにね。」（117）

8. 老年の奇矯、作家と読者

この作品については、さらに二つのことが付言されねばならない。一つは老年の変人性ということであり、もう一つは「私は私のために書いてきた」という Jakob Böhme の言葉が巻頭に掲げられている点である。

Augustin Feinlein の出身の村 Letztlingen（最後の村という響きがある）に、Konrad Peterer という農夫がいる。彼はつねに弟の農場の下働きとして働いてきたが、あるときからものを言わなくなる。小川では鱒と話し、牛を追うときは裸足で歩く。部屋ではなく干し草置き場で寝る。あいつはおかしくなった（komisch）という風評が立つ。しかしそれは彼の立場をよくする。弟ではなく兄のことがよく噂される。Konrad のうわさは善悪の彼岸を超えている。彼が死ねばみな、その埋葬に参列するだろう。

年をとると風変わり、奇矯、偏屈、つむじ曲がり、強情、頑固になる。おかしい老人、変人と言われる。しかしそこには老年の、善悪を超えた人間の権利みたいなものがある。Dr. Bruderhofer に「年老いた子ども」と陰口をたたかれたが、Feinlein 自身も「子供らしいところが私のなかにあり、それが老いよりもいっそう明確になっている」（20）と自覚する。

年老いた子供、愚者的素朴存在であることの、ひとつの正当性は認への願い。老いをめぐるとこの序幕のエピソードは、終幕の事件と呼応しあっている。子供のいたずら、素朴な遊びに通ずるところがある。「老い」は「子供時代」への還帰なのかもしれない。そこに読者を微笑ませるこの作品の明るいユーモアとイロニーがおのずから滲み出ている。

第2に、この作品の巻頭にモットーとしてドイツ神秘主義者 Jakob Böhme (1575. 3. 8～ 1624. 11. 18, in Guörlitz) の言葉が掲げられている。

「これがわかる人には、わかる。
しかしわからない人は、陰口もたたかず
咎めないままにしてほしい。
そういう人に私は書いたことはなかった。
私は私のために書いてきたのだ。」

Dr. Bruderhofer にとっては出世が、Feinlein にとっては彼岸が重要である。「私はだれも得心させようとは思わない。得心させたいのはただ自分自身だけだ。」(21) 自分自身について語るものが、結果として読者にも最もよく読まれる、という Martin Walser の言葉がある⁴。自分自身に沈潜すればするほど、自分を越えた少なくない他人の心の奥底にも深く入るといふ秘儀である。

ものを書くのは、自分あて、自分のためである。したがって短編小説『わが彼岸』は作者の彼岸である。これを読む読者には、各読者独自の「わが彼岸」がある。ただ作者の自己あての、自己のためのメッセージは、読者に受けとめられ、変容されて、各読者独自の創作となる。これは、Martin Walser が書くことと読むこと、作家と読者の関係について、くりかえし述べてきたことである。

読むことと書くことは同じ動機をもつ。同じ営みに対する表裏一体の言葉だ。現在の人生に不安や望みをもつから人は読んだり書いたりする。何か不足しているから、これを満たそうと欲する。満足している者は読みも書きもしない。自分の人生になんの不安も願ひもない者は、たとえば Franz Kafka を読みとることはできないだろう。読者と作家の関係は、演奏者と作曲家の関係に似ている。たんなる音楽鑑賞者ではない。たとえば Franz Schubert の歌曲は、もし歌い手が声と専門教育の技しかもたず、その歌のもととなった耐えがたい苦悩への予感がないならば、どういう響きになるだろうか。(「読者について」)⁵

現実はいわれわれの願ひや欲求や権利を挫折させる。しかしこの挫折に応答してくれる本がある。この応答の仮想する願ひしさを、ひとはフィクションと呼ぶ。Fiction は過ぎ去った出来事のたんなる再現ではない。何かを補足するのではなく、現実を願ひしいものへと変容することである。読者も作品に応答する。自己自身の不安や願望で応答する。作者の Fiction に、読者の Fiction で応答するのだ。すなわち読者は Fiction を二乗する。そのなかではじめて Fiction はその抗議力、批判力、願望力を展開する。ハッピーエンドのない本も、そうならざるをえなかった不幸な結末を嘆き悲しみ、幸福な結末であることを願っていることを示している。読者も作者もそう願っている。読者も作者も、欠如ある人生に満足していない者なのだ。現実にも自己にも満足すれば、もはや読みも書きもしないだろう。(同、S. 564 ff.)

この読書論は、文芸学(文学研究法)、なかんずく Wilhelm Dilthey から Hans Gadamer にいたる解釈学(Hermeneutik)の核心を突いている。小論もまた、この読むと書く、読者と作家ないし作品との関係に収斂する。

9. 生（現実）と芸術（フィクション）

『わが彼岸』は、信と愛、信と知、真と偽、信と美などの主題だけではなく、『暴れ馬』の主題の変奏ともいえるという書評がある⁶。高度成長経済繁栄の曲がり角にあった時代の人びとの心理にマッチしてよく読まれ、100万部を超えるベストセラーとなった Martin Walser のヒット作『暴れ馬』（*Ein fliehendes Pferd*, 1978）は、周知のように、中年の夫婦が、肉体的にもより優れ、社会的にもより成功したと思われる学生時代の友人夫妻に再会し、比較や嫉妬に揺れる心理を、Boden 湖の嵐の波に翻弄されるボートからの転落や、暴れ馬に出会う情景にからめ、心理と自然の嵐が混淆一体化する抒情的リズムで描き、前作『愛の彼岸』（*Jenseits der Liebe*, 1976）を「1 ページだに読むに値しない」と酷評した批評の教皇 Marcel Reich-Ranicki もこれを「観察と心理学のマイスター」「言語の名匠」とまで評価した短編小説である。

Augustin Feinlein の Dr.Bruderhofer と Eva Maria に対する関係は、Thomas Mann の *Tonio Kröger* の Hans Hansen と Ingeborg Holm に対する関係、ひんばんに引用されたので擦り切れ陳腐化された定式ともいえるが、いわゆる精神性と肉体性、芸術家気質と俗物的市民性という対立テーマのヴァリエーションといえないこともない。

しかしこの芸術と生の関係については Martin Walser 自身が *Tonio Kröger* の対立説に反撥している。

「われわれは人生から芸術を作るが、人生はまだ生きている。芸術として。芸術のなかに。芸術と人生は対立である、というようなまやかしは終わりにしよう。人生に起こりうる最上のことは、人生が芸術になるということだ。人生はあれかこれかの二者択一ではない。芸術は人生を敬わねばならない。芸術は人生に従い、人生が人生に耐えられるように従わねばならない。人生は、何ものへも強要されないときのみ、芸術へと移行できる。芸術とは人生への愛の告白なのだ。そうなれば人生は夢中にさせられる。そのように人生は芸術となる。」（『不安の開花』*Angstblüte*, 2006, S. 329）

芸術と生とは二律背反関係ではなく、芸術が生を豊かにし、生が芸術を豊かにするという生産的相互関係にあるという主張である。

Augustin Feinlein という名前は、三部作『ハーフタイム』（*Halbzeit*, 1960）『一角獣』（*Das Einhorn*, 1966）『墜落』（*Der Sturz*, 1973）の主人公 Anselm Kristlein（小キリスト）と同じく「繊細な愛すべき人」という寓意を含んでいるかもしれない。むろん聖 Augustinus が背景にある。しかしある書評⁸も指摘しているように、Augstein を暗示しているのかもしれない。作者 Martin Walser 自身はこういう覗き見の関連づけを峻拒するだろうが。

2002年ドイツを代表する知性度 No. 1の週刊誌「シュピーゲル」（*Der Spiegel*）の創設者で社主の Rudolf Augstein（1923.11.5～2002.11.7）が他界した。Martin Walser とは親友だった。2009年 Rudolf の息子 Jakob Augstein（1967.7.28生まれ）は、肉体上の父は Martin Walser だと言明して、世間を驚かせた。母は、『走れ、ウサギ』（*„Rabbit, run“*）など戦後アメリカを代表する作家 John Updike の独訳者として賞も受けた Maria Carlsson で、Rudolf Augstein の3番目の夫人

(1968～1970)である。関係者は了解済みだったといわれる。1962年10月、*Spiegel* 誌上にNATOの国防機密を漏洩したとして、Rudolf Augstein は逮捕されたが、103日間勾留尋問後釈放された。この国家権力と国民の知る権利のあいだの攻防は、戦後ドイツにおける報道の自由の新しい時代を築く嚆矢となった。国防大臣 Franz Josef Strauß (1915. 9. 9～1988. 10. 3) はほどなく辞任に追いこまれ、政治的経済的に戦後ドイツ連邦共和国の復興を導いた首相 Konrad Adenauer (1876.1.5～1967.4.19) 時代も翌1963年末終焉した。このいわゆる Spiegel 事件当時 Rudolf と Anna は恋人同志だった。Rudolf には『人間の子イエス』(*Jesus Menschensohn*, 1972, 2001) という著書がある。Martin Walser は75歳のとき、79歳で逝去した Rudolf Augstein について *Spiegel* 誌上に惜別の辞を書いている。「二人とも酔って Rudolf をおぶって階段をタクシーまで運んだことがある。彼は軽かった。石というより鳥だった。ただ思考だけから成り立っていると思えるほど軽かった。彼は気骨があった。愛すべき人だった。でも、一番言いたいのは、すばらしい奴だった、ということだ。そう叫ぶことは許されるだろう。」(*Der Spiegel*, 46/ 2002)

そういう実人生と作品との関係は、未来の実証研究にゆだねるほかはない。ただ、現実が虚構を、虚構が現実を、いいかえれば、人生が芸術を、芸術が人生を、豊かにし、美しくするという言葉は、Martin Walser 文学の核心であることを、銘記しておきたい。

10. 記号と記号対象、否定弁証法

もう一点見過ごしてはいけないのは、『わが彼岸』の巻頭に、

「Percy のために、Augustin Feinlein より」

という献辞があることである。すなわちこの短編は、Percy に伝えるために書いた、主人公の私である Augustin Feinlein の『わが彼岸』という手記なのである。

Percy は『わが彼岸』刊行の翌年2011年に上梓された500ページをこえる長編小説『母の息子』(*Muttersohn*) の主人公である。正しくは Percy Anton Schlugen。そして約100ページの短編小説『わが彼岸』は、5章から成る長編小説の第3章に組み込まれている。

Percy は、看護学校でラテン語やオルガンを教えられた Augustin Feinlein を養父のように慕っている。母 Fini (Josephine Schlugen) は Percy に「あなたが生まれるのに、男は必要ではなかった。」「あなたは、翼のない天使だ。」という。実父 Ewald Kainz は、Augsustin Feinlein の患者として州立 Scherblingen 精神病院の一室にいる。母は1973年 Stuttgart のデモで知りあった Ewald Kainz であて書いたが、一度も送らなかつた愛の手紙を Percy に読んで聞かせ、Percy はそれを自分が看護介護する Ewald Kainz に読んで聞かせる。

Percy という名は、Parzival (Wolfram von Eschenbach や Wagner 作品の主人公) や、Percy Sledge などの含意がある。Percy が主人公の『母の息子』は現代のキリスト物語である。Percy は Augustin や Kainz の傷を癒やすことのできるただひとりの Parzival である。短篇『わが彼岸』は長篇『母の息子』の一部にはめこまれて、魚がよりよき水を得たように、その生命力を増し、その重層的な意味を深める。『母の息子』は、Martin Walser 文学の珠玉の結晶であり、遺言である。キリ

ストヤキリスト教が、肯否は別としても、なぜ欧米芸術の基本テーマでありつづけるのか？ なぜ欧米の人びとの心を動かしつづけるのか？ それを含め『母の息子』については次回にゆだねたい。

*

最後に、いくつかの書評のうち、2篇に触れておきたい。

一つは、*Neue Zürcher Zeitung* の Roman Bucheli 評⁹である。

要約すれば、聖遺物の真贋と信仰の問題は、記号（能記）と記号対象（所記）との関係に似ている。記号と記号対象とのあいだの関係は、自然に与えられた一致性（Deckungsgleichheit）というよりも、慣習（Konvention）、すなわち記号が記号であることを承認し、記号と本来のもの（記号対象）とを交換しようとは思わない関係者の協約に基づいている。聖遺物は、本物であろうと偽物であろうと、すでに崇拝の対象として承認され記号化されている聖なるものである。聖遺物は、それが何かを代表し、ありありと思ひ浮かばせる、記号論的システムの一部である。崇拝されるのは、聖遺物ではなく、その代わりをする *pars prototo*（全体名称に代わる部分代表名詞、たとえば「人はパンのみにて生きるものにあらず」）である。

しかるに Augustin Feinlein にとって記号は独立している。記号が本来のものとなる。それは彼を芸術家にする。「説明しがたきこと」についてのエッセイが小説の末尾についているが、Augustin は、みずからの説明しがたい表象のなかで、記号が記号対象から自立し、意味が剥奪されることにより、挫折する。しかしこの自律した記号を知ること、彼はこの世の存在の制約から解放される。そこには救いも隠されている。

しかし社会共同体からみれば、それが老いた変人の奇矯であろうと、年老いた子供のいたずらであろうと、協約慣習からの逸脱であり、おかしくなった者として、彼はみずからの病院に収容されざるをえない。したがってこの結末は、不従順な、芸術家的な、アウトサイダー的な存在に対する共同社会の姿勢に向けての、苦みのある批判と解することもできる、という。

他の書評にない興味ある視点である。Picaso に代表される20世紀の芸術は、いわば記号の自立化であり、社会や自然からの人間精神の解放、独立、自律、救済もあらわしているともいえる。記号である言葉から意味が剥落し、能記と所記の同一性が瓦解していく状況を詩人たちも敏感に感じとった。「自分の口のなかで言葉が腐った草のように崩れ落ちていく。」という Hugo von Hofmannsthal (1874. 2. 1～1929. 7. 15) 『シャンドス卿の手紙』(1902) は有名である。言語における能記と所記の一致のみならず、思考法、道徳、社会体制ほか市民社会における慣習化し形骸化した記号と記号対象の一致（同一性）批判は、Theodor Wiesengrund Adorno (1903. 9. 11～1969. 8. 6) の「同一性批判哲学」に通ずる。その思考法、方法論が「否定弁証法」(Negative Dialektik) である。

二つめは、『わが彼岸』評ではないが、『正当性証明（義認）試論』評で、Martin Lüdke は Martin Walser と Th. W. Adorno の否定弁証法の、深層を流れる親近性を指摘している。¹⁰

Martin Walser の文学は、その出発点の Kafka 論から、時代批判的な小説や評論、イロニーと自己意識論、愛をめぐる小説を経て、晩年の現在にいたるまで、窮乏 (Mangel) の表現、宗教的インパルスの産物である。宗教は、窮乏しているものを示す (Religion zeigt, was fehlt)。文学は世俗化した宗教である。窮乏、欠如こそ宗教や文学を生む母胎なのだ。

窮乏だけが信ずることを教える。Ernst Bloch (1885. 7. 8~1977. 8. 4) の「希望の原理」である欠如が孕むユートピア願望である。Anselm Kristlein 三部作ではこのユートピア的エネルギーの減退がみられた。しかし老いた Augustin Feinlein は、負の自己意識に徹することによって、自己の存在理由、アイデンティティを探ることをけっしてやめない。彼の信も愛も、Karl Barth のいう希望なき希望、不可能への希望である。

なんの疑いもない信仰は、空洞である。信仰は不信仰と裏腹である。

信と不信の否定弁証法運動の果てに、希望の光がさすか、暗闇に閉ざされたままであるかは、神のみぞ知る。

(すぎき・けいぞう つくば国際大学非常勤講師)

Text:

Martin Walser (2010. 3): *Mein Jenseits, Novelle*. Berliner University Press, Berlin, 3. Aufl. (引用ページはアラビア数字だけで示す, たとえば78)

Martin Walser (©2011): *Muttersohn, Roman*. Rowohlt Taschenbuch Verlag, Reinbek bei Hamburg, 2013. 3

Martin Walser (1997): *Werke in zwölf Bänden*. Hrsg. von Helmuth Kiesel, Suhrkamp, Frankfurt am Main (=MW)

Martin Walser (2006): *Angstblüte*, Rowohlt Verlag, Reinbek/Hamburg

参考文献:

Jörg Magenau (2008): *Martin Walser. Aktualisierte und erweiterte Neuausgabe*. Rowohlt, Reinbek/Hamburg

Marcel Reich-Ranicki (1996): *Martin Walser*. Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt/ Main (=MRR: MW)

註:

- 1 *Der Spiegel-Gespräch: Das allerhöchste Brimborium*. In: *Der Spiegel*. 52/2012, S. 132ff.
- 2 Vgl. MRR: MW, S.79 /Fritz Martini (1984): *Deutsche Literaturgeschichte, 18., neu bearbeitete Auflage*. Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, S. 666
- 3 *Hälfte des Lebens*. In: Friedrich Hölderlin, *Sämtliche Werke*, 8 Bde., Stuttgarter Ausgabe 1946~1985, hrsg. von Friedrich Beißner, Bd. 2, S.117 / Vgl. 洲崎恵三「言葉 — 無の支配 — マルティーン・ヴァルザー」, 「つくば国際大学紀要15号」(2009年3月) 118 p. 参照
- 4 Vgl. Martin Walser: *Die Wirklichkeit wird in Grund und Boden erzählt*, Martin Walser im Gespräch mit Susanne Rössler. In: *Volltext.net/kritiken/browse/12/*. 2004. 8. 10
- 5 Martin Walser (1979): *Über den Leser—soviel man in einem Festzelt darüber sagen soll*. In: MW, Bd. 11, S. 564 ff.
- 6 Jörg Magenau: *Martin Walser „Muttersohn“*, *Lesen was klüger macht*. In: *www. Getidan /Tilman*

- Krause: Von Greisensex zur Religion.* In: *Die Welt*, 2010. 2. 10
- 7 MRR: MW, S. 79
- 8 Thomas Steinfeld: *Ach, du armer Augustin, Barfuß nach Rom.* In: *Süddeutsche Zeitung*, 2010. 2. 13
- 9 Roman Bucheli: *Das Falsche ist das Wahre. Martin Walsers Novelle „Mein Jenseits“ handelt nur vom Altern und vom Glauben.* In: *Neue Zürcher Zeitung*, 2010.2.20 / *Jesus von der Schwäbischen Alb. Martin Walser zelebriert mit dem Roman „Muttersohn“ seine religiöse Spätberufung* *ibid.* 2011. 7. 19
- 10 Martin Lüdke: *In dem Dom, den Walser baut, glauben auch die Ungläubigen.* In: *faust-kultur.de*.
Buchkritik: *Martin Walser: Über Rechtfertigung* 2012. 2. 14

Martin Walser 《*Mein Jenseits*》 —— Trilogie der Sehnsucht (1) ——

Keizo SUZAKI

Resümee (Deutsch): Martin Walsers Novelle „*Mein Jenseits*“ (2010, 82), Roman „*Muttersohn*“ (2011, 84), „*Das dreizehnte Kapitel*“ (2012, 85), inclusive „*Über Rechtfertigung, ein Versuch*“ (2011) sind vom Autor selbst <Trilogie der Sehnsucht> genannt.

Die Themen von „*Mein Jenseits*“ sind Altern, Lieben und Glauben, Glauben und Wissen, das Wahre und das Falsche usw.

Augustin Feinlein, Chefarzt des Psychiatrischen Landeskrankenhauses in Schwaben, und Eva Maria waren so gut wie verlobt. Aber sie verheiratete sich zweimal mit den anderen Männern. Sie schrieb ihm: „Ich werde dich immer lieben. Bis bald.“, am Tag der zweiten Hochzeit nach 17 Jahren „In Liebe. Eva Maria“. Daran glaubt Augustin, egal, ob es wahr oder Lüge ist. Glauben, was nicht ist, dass es sei, das ist sein Sehnsucht, seine Hoffnung, also sein Jenseits. Doch fand er in Basilica Sant’agostino zu Rome in Caravaggios Bild der „*Madonna dei Pellegrini*“ eine Verwirklichung seines Jenseits.

Auch der Glaube allein gibt den Gläubigen ihre Lebenskräfte. Ob ihre verehrten Reliquien echt oder unecht ist, ist nicht wichtig. Um sie vor dem oberflächlichen Glauben zu bewahren, brachte Augustin im geheimen das Monstranz in sein Prälatur. Da seine Handlung jedoch für verschoben gehalten war, wurde er in seine eigene Klinik interniert.

Der Vorname Augustin kommt wahrscheinlich aus dem heiligen Augustinus, aber auch dürfte vielleicht als Anagramm von Augstein gelesen werden.

Zu beachten ist Martin Walsers Wort, dass Leben (Wirklichkeit) und Kunst (Fiktion) kein Gegensatz wie in *Tonio Kröger* sei, sondern dass die Kunst das Leben fruchtbar verschönern könne und vice versa.

Schlüsselwörter: 1) Lieben, 2) Glauben, 3) Reliquien, 4) Altern, 5) Jenseits

Abstract (Englisch): Martin Walser’s Novel “*Mein Jenseits*” (2010, 82), “*Muttersohn*” (2011, 84), and “*Das 13. Kapitel*” (2012, 85), including his essay “*Über Rechtfertigung, ein Versuch*” (2011, 84) are called as <Trilogie of yearning>.

The themes of “*Mein Jenseits*” are old age, love and believe, believe and know, the truth and the false.

Augustin Feinlein, chief of the county psychiatric hospital in Schwaben, and Eva Maria were as good as engaged. She married twice the other men. She wrote him, “I love you forever. Till soon.”, and at the second marriage after 17 years, “In love. Eve Maria.” Augustin believed her, equal, if it is true or not. Believe, what

doesn't exist, that it exists. It is his yearning, his hope, also his eternity (Jenseits). But he found a realization of his eternity in Caravaggios "*Madonna dei Pellegrini*" at Basilica Sant'agostino in Rome.

And also only the believing could give the believers energy to live. Whether the venerated relic is true or not, is not important. In order to save them from superficial believing, Augustin brought out the monstrance into the prelature room. As his behavior was however regarded as eccentric, he was interned into his own clinic.

The first name Augustin comes probably from St. Augustinus, but also might perhaps be read as anagram of Rudolf Augstein, the founder of "*der Spiegel*".

Important is to consider Martin Walsers words that life (reality) and art (fiction) is not any antithesis as in "*Tonio Kröger*", but the art can make the life beautiful and fertile and vice visa.

Keywords: 1) love, 2) believe, 3) relics, 4) old age, 5) eternity (Jenseits)